



病院開設30周年を迎えて

現在の理事長は医家として二代目です。初代は北横地で昭和22年より57年の長きに磯部地区の医療に従事してきた。そして、三代目へとバトンタッチされたのを機会に、理事長に自らの半世紀を振り返って貰いました。



磯部小学校

この地に開業をして30年目にあたります。そして、この4月に私は院長を辞し、理事長に就きました。私は7歳までこの羽崎に住んでおりました。母に連れられて幼稚園の入園式に見た校庭の桜が今でも目に焼きついております。当時の羽崎は今の6分の1の所帯ですが同級生が八人も居て一緒に通学しました。父の復員で旧国道8号線沿いの横地に引っ越しましたが、翌年には福井大地震に遭遇しております。父は明治人の気骨を持って豪快でしたが、磊落まどとはいえませんでした。

父の幼少時

遠く離れた新潟は新鮮でしたが、大学入学2ヶ月後に安保闘争のデモに参加したことで下宿を追い出されました。途中新潟地震があり、卒業時はインタン闘争で終わるなど混沌としたものでした。夏

休みで帰省した際、中野の叔父から「こんど新潟に神経内科が新設され、とても厳しい椿先生という方が赴任されるからそこに入局してはどうか」と聞かされました。叔父は開業の身であっても精神神経の思いが強く、『臨床神経



入局直ぐに、新潟水俣病とスモン病の両方の原因究明に入り、とても活気がありました。当時、東大、九大、新潟と三ヶ所だけでしたが、重鎮の沖中教授は神経疾患を診る医師を全国に送ることが念願であると話していました。

7年間の医局生活から福井に戻り、県立病院に初めて神経内科の標榜を掲げて貰いました。孤立奮闘でしたが大月五(あつむ)院長は面倒見がよく多くの医師が慕っていました。院長が心疾患で辞するに殉じて私を含めて何名かの医師が辞めました。

父の思い出

福井医大設立の槌音のなか当地に開業しました。私は42歳、父は71歳で今の私の歳です。35年間の開業医を辞めてこの病院の勤務医となりました。夕方になると『先に失礼する』と言って帰って行きました。糖尿病を患い足が弱っていました。時には歩いて帰る事もありました。そして、茜会は老健施設、グループホーム、吾亦紅と事業展開して行きました。

新潟水俣病

新潟水俣病

2009年暮、突然、社会的ストレスにて倒れてしまいました。動悸と不安発作です。3ヶ月で7kg痩せました。その間、全職員と応援ドクターをはじめ京都で研究中の息子が週2回の出張を1年間通って呉れて持ち堪えました。病院収入がいつもより好かったなど不思議な現象もみられました。心臓発作も出現し遺書を書こうとしたのですが、財産のほとんどが法人のものであり、自分の財産は特に無いので止めました。回復した今、このときほど茜会の役員をはじめ職員や患者さんに励まされ、慰められたことが身に滲みて生きる力になっていたと感じました。

茜会のあした

新院長はこれまでの意志を継いで「チーム医療」に理解を示しています。私自身これからは健康に気をつけて応援して行きたいと思っています。

